

氏 名	馬 抒
学 位 の 種 類	博士(音楽)
学 位 記 番 号	乙第4号
学 位 授 与 年 月 日	平成23年5月12日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 題 目	ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールにおける委嘱作品 及び新曲の特徴
論 文 審 査 員	主 査 教 授 柴田美穂
	副 査 教 授 伴谷晃二
	副 査 准 教 授 馬場有里子
	副 査 名 誉 教 授 廣澤久美子

論文内容の要旨

本論文は、国際音楽コンクール世界連盟に加盟した最初のアメリカの国際ピアノ・コンクールであり、1962年の第1回開催以来、委嘱作品或いは新曲を課題曲として課すことを重視してきたヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールを対象とし、第1回から2009年第13回までの全委嘱作品及び新曲の特徴をピアニストとしての立場から分析したものである。

コンクールの委嘱作品は、現代のピアノ曲のレパートリーにおいて、新たな興味深い1分野となっていると考えられる。誰もが推測できるように、限られた期間で仕上げ、コンクールという場で演奏することを前提とした委嘱作品は、多かれ少なかれ容易に弾けるものではない。そこで、そうした作品の中でどのような能力が問われ、どのような表現が求められ、何がその曲の演奏のポイントとなっているのかを考察しようと考えた。

本論文ではまず、世界各地の主要な120以上のコンクールによって1957年に設立された全世界トップレベルの音楽コンクール組織である、国際音楽コンクール世界連盟に着目し、そのうち60以上のピアノ・コンクール及び様々な楽器対象の部門を持つ総合コンクールのピアノ部門を徹底的に調査した。そのうち、委嘱作品を課題曲の中に入れているコンクールないしピアノ部門は22例があった。但し、その扱いが継続的であるコンクールもあれば、一時的にしか取り入れていないコンクールもある。また、委嘱作品を継続的に取り上げているコンクールのうちにも、歴史のあるコンクールとそうでないコンクールがあることも判明した。

委嘱作品を課題曲の中に継続的に取り入れてきたコンクールの中で、特に長い歴史を持つのはエリザベート王妃国際音楽コンクールとヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールの2つである。

1937年に設立したエリザベート王妃国際音楽コンクールは、ピアノ部門の審査が1938年に始まった。その後、第2次世界大戦のために中止され、1952年に再開された。委嘱作

品（或いは同コンクール作曲部門での優勝作品）を予選（ピアノ独奏曲）と本選（ピアノ協奏曲）でそれぞれ1曲ずつ演奏させることが特徴である。

ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールは、1962年にスタートして以来4年に1回開催され続けてきた。委嘱作品については、1962年第1回から1997年第10回までは、毎回1曲をアメリカ人作曲家に委嘱し、それを予選で演奏者全員に演奏させるやり方を採っていたが、2001年第11回からは、募集によって採用する形に変えられ、課題曲自体の審査というもう1つのコンテストが設けられた。すなわち、コンクール側があらかじめ選んだ複数のアメリカ人作曲家を対象に既存曲ないし新作を募集し、その中から選んだ4つないし5つの曲が参加者に提示される。参加者は各自の選択によって任意の1曲を予選で演奏し、最も多くのファイナリストに選ばれた作品には大賞が与えられる。これによって、演奏者もいわば審査の一端を担うことになった。

エリザベート王妃国際音楽コンクールが委嘱作品として独奏曲、協奏曲の両方を取り入れている点は興味深いが、本論文は、委嘱作品が独奏曲に限られ、また2001年以降その扱い方に独自の特徴が見られるヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールに研究対象を絞ることとした。そして、その第1回から2009年第13回までの委嘱作品及び募集による新曲の全23曲を取り上げ、ピアニストとしての立場から見た、それぞれの作品のメカニクを中心にした特徴と、全体的な変遷についての考察を試みた。

本論文は全6章から成っている。第1章では、国際音楽コンクール世界連盟に加盟している国際ピアノ・コンクールにおける委嘱作品の位置づけと、本論文で研究対象とするヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールの2009年第13回コンクールまでの委嘱作品及び募集による新曲の概略を述べた。第2章では、ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールにおける委嘱作品及び新曲について、分析に当たっての基本方針を述べた。第3章と第4章では、2009年第13回コンクールまでに取り上げられた計23曲の委嘱作品及び募集による新曲のそれぞれの特徴について、特にメカニクの要素に焦点を当てて論じた。第5章では、第3章と第4章で述べた全23曲の分析を踏まえて、それらに見られる傾向や新しい試み、及び共通点や相違点について概括した。第6章では、全体の総括として、同コンクールの約50年の歴史における23の委嘱作品及び新曲に見られる特徴とその変遷についてまとめた。また、付録として、国際音楽コンクール世界連盟に加盟するピアノ・コンクール（或いはピアノ部門）の2010年までの独奏委嘱作品及び新曲のリスト、国際音楽コンクール世界連盟に加盟するピアノ・コンクール（或いはピアノ部門）における2010年までの独奏委嘱作品の扱いに関するデータ一覧表、2009年第13回までのヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールの委嘱作品及び新曲のCD録音リストを載せている。

ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールの委嘱作品及び2001年からの新曲の歴史を概観したときに、まず初めに指摘できる明らかな変化として、曲の演奏時間がより長いものになってきたこと、と同時に技巧的難易度がレベルアップしてきたことが挙げられる。

1962年から97年までの10曲の委嘱作品に関しては、その特徴の変遷が比較的明瞭に見

いだせる。つまり、1962年から69年までの1~3曲目はいずれもメカニカルな技巧性を重視するもので、1973年から81年にかけての4~6曲目は、メカニックよりも音楽の表現力が試されるものである。1985年の7曲目は、メカニック、音楽性のいずれよりも演奏者自身の自主性や個性を強調するものである。1989年から97年にかけての8~10曲目は再びメカニックを重視するものとなっており、演奏の難易度が60年代の3曲よりはるかに高くなっている。それに対し、2001年以降の13曲の新曲に関しては、引き続き、大部分が個性的で難易度の高い作品となっているものの、明確な変遷を見いだすことやグループ化を行うのは困難である。毎回のコンクールごとに提示される4ないし5つの曲は、その殆どがそれぞれ異なる特徴を持っており、音楽の性質、曲のタイプ、メカニック、演奏の全体的な難易度などのいずれの面でも共通性の少ない曲となっている。その一方で、これら13曲の新曲の中には、左右の手を最大限に独立させて、テンポ、強弱、アーティキュレーションなどが全く異なる内容を同時に演奏させるなど、2001年以前の10曲の委嘱作品の中では殆ど見られなかった要素も見いだせる。さらに、新曲の中には若い作曲家と女性作曲家の作品も含まれており、より個性的で新鮮味のある曲の数は、委嘱作品より遥かに多くなっている。

計23曲の委嘱作品と新曲を全体的に見てみると、初めてミニマル・ミュージックの手法を用いたジョン・コリリアーノの《オスティナートによる幻想曲》(1985年第7回)、最初に内部奏法を取り入れたジャン・クルジウィキの《ノクターナルズ》(2001年第11回)と、演奏者の実際の演奏を既成のCDに合わせるという新しいスタイルを試みたメイソン・ベイツの《ホワイト・ライズ・フォー・ローマックス》(2009年第13回)は、特に目立つた特徴を持つ作品として注目される。中でもベイツの作品は、コンクールという場における演奏スタイルの可能性に新風を吹き込んだのではないかと考えられる。

1997年までの計10回のコンクールでは、全ての参加者に同じ曲が課されてきたが、2001年以降のコンクールでは、互いに特徴の異なる数曲を参加者に与え、その中から1曲を選ばせることで、演奏者個々人の特長や好みをより重視する形に変わっている。このようなやり方は、参加者にとっても選択の自由を得ることができ、コンクール側にとっても、課題曲のレパートリーを広げ、より多くの現代曲を世に広めることに繋がる。これまでの参加者による新曲の選ばれ方を見ると、仕上げやすい曲のほうが多く選ばれてきた傾向が見られるとはいえ、全ての参加者が必ず同じ曲を選ぶわけではない。参加者の選曲の仕方によって、その考え方や実力の一面を知ることができ、審査員にとって有力な情報を与えてくれる要素となっている。また同時に、最も多くのセミファイナリストに選ばれた曲に大賞を与えることによって、演奏者と作曲家との間にも互いに刺激し合うことのできる機会を作っているのではないかと考えられる。こういった点からみて、ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールの新曲は、課題曲の今後のあり方の新たな可能性を示唆する重要な意味をもつものであると言える。